

## 「待つ楽しみ」が消えつつある文化

「そういうわけで今週は都合がつかなくなった。悪いねえ。来週は大丈夫だから」。すまなそうな謝りの携帯電話は小学校時代の同級生からだった。この日の夜の再会を私も楽しみにしていたのだが、向こうの都合で急きょ延期となった。還暦のとき、郷里で行われた同級会以来だからもう7年になる。「そりゃあやむを得ないね。残念だけど、じゃあ来週」と電話を切った。

ずいぶん便利になったものである。出先まで電話がつながる時代だ。状況の変化を瞬時に相手まで伝えることができる。でも、あまりに早いものごとの進展は便利な半面、何か心の奥まで届かないときもあるような気がする。

そういえば、昔は何をするのにも、「待つ楽しみ」があった。手紙を出せば、返事が来るのを何日も待った。欲しいものを頼めば、それが手に入るまで、まだか、まだかと楽しみにしていた。届いた手紙は味のある毛筆だったり、ペンやボールペン字でも本人の直筆で親しみが湧く。何回も読み返したり、手紙の向こうにある情景を想像したりもした。

今は、遠く離れていても、電話かメールですぐに連絡が取れる。その代わり、待っているときの楽しみが半減した。どこへ行くのも、何をするのも、そこに至る前のワクワク待っている時間が楽しいものだ。

恋人とコーヒー店での待ち合わせ——昔は心をときめかせながら、彼女を待つあいだコーヒーを楽しんだ。今は「あと5分で着くわヨ」と降りた駅からメールが入る。待ち人が突然に現れるという意外性がなくなった。胸を躍らせながら待つ時間には、心豊かな得がたいものもあるのではなからうか。

携帯電話もパソコンも日進月歩。数年ごと、いやときには半年ごとに新しい機種が出てそれを追いかけてさせられる。何年か経過して型が古くなると、そのサービス機能さえ合致しなくなり、やむを得ず新機種を買わざるを得ない状況に追い込まれる。

そもそも現代は忙しすぎる。話は飛躍するが、人類はすでに200万年前に生活していた。「有史」などという2000年やそこらは、その1パーセントにも満たない。「文明の危機」などと騒いでいる現代の10年とか100年ほどの時間は、10両連結の電車と言えば、1席分にも満たないだろう。

機械文明の進歩は、速さと便利さをもたらしてはくれたが、必ずしも100パーセント人々に幸せをもたらしてくれたとは言い切れない。モノが豊かになったこと、必ずしもすべて幸せにつながってはいない。際限のない欲望文明は「昔はきれいだった」地球環境の破壊をもたらし、人間生命の危機さえももたらしている。

平安時代と現代の人々とどちらが幸せか、なんて問いの結論も簡単には出ないだろう。ノスタルジアに浸るわけではないが、「昔のほうが楽でよかった」という声も聞く。自分のような高齢者は、情報文明から追い立てられているみたいな気がする。

そこにいくと、私が永年駐在していたラテン・アメリカは、日本よりゆったりしている。その生活を象徴しているのが「アスタ・マニャーナ」というスペイン語だ。日本語に訳せば「あしたまで」とか「あしたまた」と、偶然に語感も似ている。私はこの「アスタ・マニャーナ」で何回もうっちゃられた。

パナマに駐在していたある日、自宅の電話が故障してしまった。熱帯パナマに四季はない。雨の全く降らない乾季と一日おきほどに激しいスコールの降る雨季の2シーズンのみ。この雨季の、まさに滝のような雨に見舞われた翌日は、決まって市内のいくつかの電話が通じなくなる。古い回線部分に水がしみ込んで支障をきたすのである。わが家の電話もどうもそこに原因があるらしい。さっそく近くの公衆電話から電話局に修理の依頼を申し込んだ。

「ハイ、わかりました。係りに報告しておきます」

電話口に出た交換嬢の愛想はすこぶるよかった。ところが、待てど暮らせど「係り」は来ない。そこでもう一度ダイヤルを回した。

「もう報告してあるから、まもなくそちらに着くでしょう」

果たせるかな、とうとうこの日「係り」は来なかった。緊急の電話連絡もたまっている。少々いらいらしていると、パナマ滞在では先輩の隣人いわく。

「そりゃハポン（日本）と同じことを期待するのが無理ですよ。ここは1年中暑い国。あなたみたいにセカセカ動くとは身体に悪い。郷に入ったら郷に従え。ハラを決めることですよ」

翌朝、公衆電話からの催促のみでは不十分と見た私は、南国の太陽の照りつけるなか、電話局まで直接交渉に赴いた。そしてスペイン語での日本式談判に入った。

「昨日電話した件、修理に来ていませんがどうしたのでしょうか」

「係りがいなかったのだ」

「こちら急いでいます。では担当の係りの方にできるだけ早く・・・」

「わかった、わかった。できるだけ努力はする。でも、もしきょう行かれなければまた明日ネ」

これだ！この明日というやつだ。明日もあるのだ。その次という日もある。ここではそんなにあせってはいけないのだ。幸運にも電話はその日の午後には修復した。電話局の上層幹部にアミーゴ（友人）を持つわがアミーゴが、特別に手配してくれたからだ。

こうした生活が続くなかで私は次の「五つの『あ』の原則」を編み出した。それは「あせらず」「あわてず」「あくせくせず」「あてにせず」でも決して「あきらめず」。少なくともこの「五原則」をハラにおさめている限り、いらいらして余分な神経をすり減らすことも少なくなるのがわかってきた。

「アスタ・マニャーナ」とはすることを先に延ばしているのもあって、決して「やりません」とは言っていない。その意味では、相手も自分も傷つけない優雅な言葉なのだ。ともあれ、こんなアスタ・マニャーナのリズムで動いているラテン・アメリカのおおらかな社会に、せ

かせかした日本式リズムで飛び込めば、時間の歯車がかみ合わず、ギアが欠けたり空回りするのが当然の成り行きかもしれない。

前述のケースは特殊例としても、ラテン・アメリカを旅していて、飛行機が1時間や2時間遅れるのはまれではない。でも乗客はとりたてて目くじらをたてたりしない。「どうせいつかは動くんだから」と悟りきっている風情がある。

日本を訪れたラテン・アメリカ人が帰国後に一様に報告すること。それは日本の治安のよさ、秩序だった行事の運営、そして交通機関の時間の正確さである。何本もさくそうする都内の電車が数分おきに発着すること、あのシンカンセンが数秒も変わらずピタリと駅の乗降場所に停車するなど、彼らにとって神技に近いのかもしれない。

半面、日本人がこの交通機関に命令されたかのように、バス停から駅へ、ホームから乗車口への黙々と歩いていく様は、少々異様にさえ映るようだ。同じ黒味がかった衣装の人間の群が怒涛のように吐き出されてくる通勤時の駅の情景をじっと見ていたボリビア人が「アッ！戦争が始まる！」と駆け出したという逸話があるがむべなるかなと思う。

あえて言えば、「人間が主人で時間は従者」のラテン・アメリカに対し、「時間が主人で人間が従者」の日本ともとれるかもしれない。ともあれ「時は金なり」という格言はここではあまり通用しないのである。

ついでにもう一言。特に日本人は急ぎ過ぎです。ちなみに、ホテルの受付で待たされるお客さんがイライラし始めるまでの時間は：アメリカ人 10 分、中南米人 40 分、日本人 5 分と言われます。「走る日本人、待てない日本人」なのです。